

エラスムスの *Epicureus* (1533) について

木ノ脇 悦 郎

前回紹介した対話作品 “*Ploblema*” と共に『対話集』1533年3月版に新しく加えられたものである。この版は『対話集』最終版であるので、ここに訳出した作品 *Epicureus* はエラスムスの最後の対話作品であるということになる。*Ploblema* の解説にも示しておいたように、エラスムスはギリシャ、ローマの古典に関する作品の校訂版、翻訳、紹介を多く手がけていると同時にその著作の随所に古典からの引用が見られる。人文学者としての面目躍如というところである。

ところで、最後の対話が「エピキュリアン」であるということにはどんな意味があるのだろうか。筆者にとってそれは単なる偶然とは思えないのである。つまり、1520年代の作品に多く見られるキリスト教世界の改革、道徳的、倫理的改良への熱い想いがこの作品にも込められており、その延長線上に位置づけて読まれるべき作品と考えるべきではないかと思われるのである。そのことは、前回の *Ploblema* において示されたことと同じ意図から出ているといいかえることも出来る。つまり、前回の作品ではアリストテレスの『天体論』によりつつ論議を進め、最後には罪の認識と罪から離れるための人間の健全な洞察という極めて人文学者的な展開が見られたのである。

「エピキュリアン」と言えば、一般に快樂主義者として片づけられ、おおよそ厳格なキリスト教倫理とは無縁のものであるとされるものである。しかし、エラスムスはキリスト教的な生活こそが正しい意味でのエピクロス主義である

エラスムスの *Epicureus* (1533) について

ことを論証していくように対話を展開するのである。それが古典作品の読み方として正しいのかどうかということは別にして、キリスト教的フマニスト達理解では古典、古代哲学の教えにキリスト教的視点を与えることによりそれは無限に豊かなものとなるのである。エラスムスの作品にそれを当てはめるとすれば、事柄は逆転する。つまり、古典や古代異教哲学がそのものとしての意味を持つのは当然であるとしても、古典そのものが関心の対象というのではなく、聖書やキリスト教の理解のために役立つというものである。つまり、キリスト教を理解するための予備学としての理解ということになる。例えば、『校訂版新約聖書』 *Novum Instrumentum* (1516) の序文や1522年版『対話集』の内「聖なる饗宴」 *Convivium Religiosum* に代表的に現れ⁽¹⁾、その他の作品においても重要な基調音となっているものである。すなわち、キリスト教と異教古典が決して排除しあうものではないという理解である。

従って、この作品では、当時、放蕩や感覚主義、無神論と同義語として誤って理解されていたエピクロス主義を、エラスムス一流の逆説でキリスト教と矛盾するものであるどころかむしろ同一の主張を持つものとして高く評価するという立場を明らかにしている。つまり、一般的な用語の理解を超えて厳密にその用語の意味するところを問い、一般化され、誤解されている用語や歴史的概念にその本来の意味を取り戻し、そうすることで自分の主張したいことを明らかにして行くと言う構造を持たせているのである。それが、この作品では「快樂」という言葉の理解をめぐるやり取りということになっているのである。つまり、エピクロス主義すなわち快樂主義という理解の内に感覚的快樂主義への批判が込められていたわけで、エラスムスはエピクロスの快樂が必ずしも感覚的なものでなくむしろ精神的なものであるということを明らかにし、それがキリスト教的快樂と同一のものであるとした上で、人々の求めるべき価値としての精神的喜びを展開している。

従って、表現としては快樂主義でありつつ、その内実は中世以来キリスト教の伝統的価値観となっていた *Contemptus Mundi* (世の蔑視) を指し示しているものとさえいえることが出来る。そのことから、最後の作品である「エピキュ

リアン」において、エラスムスはこれまで主張し続けてきた改革的姿勢を明らかにすると共に、方法論としての人文学を十分に活用したのではないかと思われる。ここに読者はエラスムスの方法論と主張の論点と、さらには論理構成の有り様を同時に読み取ることが可能となるのである。

本文はアムステルダム校訂版全集 (ASD) *Erasmi Opera Omnia* 1-3、p.721-733とライデン版全集 (LB) *Desiderii Erasmi Opera*、Tom. I、p.882-890を底本としている。なお、紙数の都合上、注記は最小限に止めた。

Hedonius, Spudaeus⁽²⁾

(以下、本文ではそれぞれ **Hed**, **Spu** と略記する)

Hed. スプダエウスさん、こんなに多くの書物に熱中して一体何を探そうとしているのでしょうか。ぶつぶつ独り言を言っているけれども何を云っているのかさっぱり分かりませんね。

Spu. 私が求めようとしているのは何か、ヘドニウスさん、それははっきりしていますよ。自分が求めている以外のものでないことが。

Hed. ポケットの中に持っている書物は一体何ですか。

Spu. キケロが善の目的について書いた対話です⁽³⁾。

Hed. 善の目的を問うよりもむしろその始まりを問うほうがよっぽどましではありませんか。

Spu. ところが、キケロは善の目的こそあらゆるもののうちで全き善であると言っているのです。つまり、それに達した人はそれ以外のどんなものをも求めたりはしないのです。

Hed. その作品は第一級の知性と雄弁を備えたものですが、彼が本当の認識に達するための願い以外の努力をその中に何か持っていると思いますか。

Spu. 私が、以前よりも今は目的について疑問を持つようになったことがはっきりしてよかったですと思っています。

Hed. 目的について疑問を持つというのは百姓の特性ですね。

Spu. 多くの人々の中で、様々な見解の相違があったということについては別

エラスムスの*Epicureus* (1533) について

に驚くこともありません。

Hed. 勿論、多くの過ちがあるというのは、真理が一つしかないからです。彼らは、全ての物事の始源を知らないのですから、彼らが予測していることは狂っております。ところで、どの見解が目的により近いようにあなたには見えるでしょうか。

Spu. キケロの攻撃を聞いておりますと、一つとして気に入るものはありませんし、逆に弁護しているのを聞きますと、すぐにも判断を下しそうになるのです。しかし、私としてはストア派が真実に近いと思いますし、その次にはペリパトス派を持ってきたいと思います。

Hed. いや、そうではありませんね、私にはエピクロス派より他に気に入るものはありません。

Spu. ところが、全ての中でそれほど否定的に判断されているものはないのです。

Hed. 評判の悪い名目などはほっておきましょう。欲するものは誰であれエピクロスになるのです。事柄に促して考えてみましょう。彼は人間の幸福を快楽に関係させていますし、それこそが最も幸せだと判断しているのです。つまり、最大限の快楽と最小限の悲しみだけを持つということなのです。

Spu. それはそのとうりです。

Hed. その考えの方がより敬虔なものだということがどうして言われ得るでしょうか。

Spu. とんでもありません。誰でもそんな考えは獣の云うことであり、人間の云うことではないと叫びますよ。

Hed. それは知っています。しかし、それこそ事実と名称が違っているのです。本当のことを言えば、キリスト者の敬虔な生き方ほどエピクロスの的なものは他にないのです。

Spu. キュニコス派こそよく似ています。というのは、彼らは断食の苦行をしますし、自分の罪を深く嘆き、自分が惨めであり、また自分の貧しさに

エラスムスの*Epicureus* (1533) について

よって寵愛を勝ち得るからなのです。彼らはもっと力のある者達から圧迫を受けますし、多くの人々からの嘲笑をもうけているのです。もし快樂が幸福をもたらすものであるとしますと、このような人生は快樂からはるかに遠く離れているように思われます。

Hed. プラウトゥスの權威を持ち出しましたね。

Spu. もし彼の言うことが正しければですが。

Hed. では、ストアのあらゆる逆説よりももっと賢い哀れな奴隷の言うことを受け入れなさい。

Spu. そのように望んでいますよ。

Hed. 「自分が悪いと自覚する精神よりも哀れなものは何もない」とね⁽⁴⁾。

Spu. その諺を拒もうとは思いませんが、どのような結論をお持ちなのですか。

Hed. もし自分を悪いと自覚する精神が惨めでないとすれば、自分を善であると自覚する精神も幸いではないという結論になるのです。

Spu. なるほど、正しい結論でしょうが、しかし、それではどんな悪をも自覚しないような精神を、一体あなたはどこで見出すでしょうか。

Hed. 私が悪と呼んでいるのは、神と人間の間にある親密さを壊すものです。

Spu. しかし、そのような種類の悪に汚されていない者など実に少ないのではありませんか。

Hed. でも、私としては汚されていない少数の人のゆえに弁明も出来るのです。涙という石鹼、懺悔という石鹼、あるいは愛の火で汚れを清める人は、罪に害されることがないばかりでなく、もっと大きな善への道が開かれているのです。

Spu. 確かに、私は石鹼のことは聞いたことがあります、汚れを清める火のことについては聞いたことはありません。

Hed. 金銀細工人の工場を訪ねてごらんください。金が火で洗浄されるのを見ることが出来るでしょう。一方で、火の中に投じても燃えてしまうことなく、しかも、どんな水で洗うよりも、もっと明るく輝きを増すようなある種の亜麻布があります。それは生きているものと呼ばれているので

エラスムスの*Epicurevs* (1533) について

す。

Spu. 全く、あなたはストアの全パラドックス中のパラドックスである *παραδοξότερον* を示されました。キリストが悲しんでいる人達について、彼らは幸いであるといった快樂の人生を彼らは生きているというのですか⁽⁵⁾。

Hed. 彼等は世に対し悲しんでいるように思えますが、しかし実際には喜んでおり、習慣的に言われていることによれば、蜂蜜を塗って快適に暮らしているように見えるのです。彼等に比べてみますと、サルダナパルス、フィロクセヌス、アピティウス、その他快樂にふけっていることで有名な人も憂鬱で悲しい人生を過ごしていることになります。

Spu. 聞いたこともないようなことをおっしゃいますが、そんなことは信じられません。

Hed. では試してごらんなさい、そうすれば私が正しかったということがよく分かることでしょう。私の考えではそれが真実とそんなに違っているとは思えませんので試してみましょう。

Spu. どうぞ。

Hed. もし私に賛成して下さるなら、始めましょう。

Spu. あなただって同じ事を要求していますよ。

Hed. もしあなたが資本を提供して下さるなら、私は利益を加えるでしょう。

Spu. では、どうぞ。

Hed. まず、あなたは心と体の間に何か違いがあることを認めると思いますが。

Spu. 天と地、不死と死ほどの大きな違いがあると思います。

Hed. 次に、間違っている善は善のうちには入りません。

Spu. そのとおりです。影が本体の代わりになったり⁽⁶⁾、魔術師のペテン、お笑い種の空想が真実の代わりになったりするほど大きな過ちは他にありませんから。

Hed. ここまではうまく答えました。私の考えでは、本当の喜びは健全な心以外には生じないものだと思いますが、あなたも認めますね。

Spu. いけませんか。だって目が霞んでいますと、誰も太陽を楽しむことは出来ませんし、熱で味覚が駄目になっておれば、ワインを楽しむことも出来ません。

Hed. 違っていなければ、エピクロス自身、快樂が非常に大きな、長時間にわたる苦痛を自分に引き寄せるものであると考えていたようです。

Spu. 彼がどのように理解していたか知りませんが、私はそうは思いません。

Hed. ところで、神が、それ以上美しいものもなく、それ以上愛情深いものもなく、それ以上愛すべきものもないような最高善であることをあなたは否定はしませんよね。

Spu. もしキュークロープス⁽⁷⁾よりも彼が恐るべきものでなければ、誰もそのことを否定したりしない筈です。それで、どうなるのですか。

Hed. 今、あなたは、敬虔に生きるものよりも快適に生きる者はいないことを認められましたし、不信仰な生き方をしている者よりも哀れで不幸な生き方をしている者はいないことも認められました。

Spu. そうです、自分が考えている以上に多くのことを認めてしまいました。

Hed. けれども、プラトンが言っているように、正當に譲り渡したものを取り戻すべきではありません。

Spu. 続けて下さい。

Hed. 快適に守られ、よく飼われ、軟らかな床に臥している小犬は幸せに生きていることにならないでしょうか。

Spu. そうですね。

Hed. あなたもそのような人生をお望みにになりますか。

Spu. 人間である代わりに、犬になりたいとでも思わなければ、何とめでたい言葉でしょうか。

Hed. ですから、あなたは優れた快樂というものが、泉から沸き上がるように心の中から湧き出てくるものだということを認めたことになりますね。

Spu. そのとうりです。

Hed. つまり、心の力というものは、しばしば外的な苦痛の感覺を取り去るほ

エラスムスの*Epicureus* (1533) について

どに大きなものなのです。それ自身では苦いものを喜ばしいものに変えてくれるのです。

Spu. そのことは恋人達が毎日体験していることですね。彼等にとって、恋人の戸口で徹夜することや冬の夜に寝ずの番をすることさえ甘美なことなのです。

Hed. 次のことを考えて見て下さい。もし人間の愛が、牛や犬と私達に共通するような大きな力を持っているとすれば、キリストの霊に由来する天的な愛は何と大きな事が出来ることでしょうか。それ以上に恐るべきものは何もないような死さえも愛すべきものに変えてしまうほど大きなものなのです。

Spu. 他の人達が、その中で何を考えているか私は知りませんが、ただ、本当の信仰につながっている人というのは多くの快樂から遠ざかっています。

Hed. どんな快樂ですか。

Spu. 彼等は豊かではありませんし、名誉も得ておりません。宴会をしませんし、踊りません、歌いません、油を塗りません、笑いませんし、どんな楽しみをも知りません。

Hed. 喜ばしい人生ではなく、むしろ不安や心配をもたらすような富や名誉について考察しようというのではありません。その為にする努力が楽しく生きることであり、人々が第一に求めるようなものについて考えてみようと思うのです。あなたは、毎日酔っ払いや愚かな者、笑ったり、踊ったりしている狂った者達を見るのではありませんか。

Spu. ええ、見ますね。

Hed. では、彼等が幸せに生きているとお考えになりますか。

Spu. そんな喜びは、むしろ敵になってしまうことでしょうよ。

Hed. どうしてですか。

Spu. なぜなら、そのようなことは健全な心には生じないからです。

Hed. それで、あなたはそのようなことで楽しむより飢えや書物に心を向けるほうを選ぶのですね。

Spu. 確かに、私は土地を耕す方を選びます。

Hed. つまり、金持ちと酔っ払いの間の違いというのは、酔っ払いの精神錯乱には眠りが利き、金持ちは医者世話によって助かるというほどのこと以外はないということなのですね。本性的な愚か者は身体の形態を別にすれば、野獣と何も違ったところはありません。ただ、自然が生んだ野獣の方が、野獣のような欲望で理性を失った者達より哀れさという点ではまだしもましだと言うべきでしょう。

Spu. そのとうりだと思います。

Hed. 欲望の幻惑や闇の故に心の本当の快樂をなおざりにし、自ら責め苦を招き寄せる人は思慮ある健全な人だと思えますか。

Spu. そうは思えません。

Hed. なるほど、彼等は酒にこそ酔ってはおりませんが、愛、怒り、貪欲、野望、その他不正な欲望に酔っているのです。そのような酩酊は酒によって引き起こされる酩酊よりもはるかに有害なものなのです。かのシルスは喜劇の中で、十分に眠った後で飲む少量の葡萄酒は思慮あるものだと記しています。しかし、邪悪な欲望に酔っている心は、何と自分を取り戻すことに不承不承になることでしょうか。また、愛、怒り、憎しみ、情欲、放蕩、野望といったものは何と長い年月、心を悩ますことでしょうか。また、青年から老人まで生涯の間、野望、貪欲、情欲、放蕩、酩酊から決して目覚めることなく正気に戻らない多くの人々がいるのを私達は見ることでしょいか。

Spu. そのような人を、私はとてもたくさん知っていますよ。

Hed. あなたは、誤った善は善とは見なされないことをお認めになったわけですか。

Spu. 否定は致しません。

Hed. 正しいことから生まれたものでなければ正しい快樂ではありません。

Spu. そのとうりです。

Hed. ですから、人々が正しいあるいは正しくないことによって得ようとして

エラスムスの*Epicureus* (1533) について

いるものは必ずしも本当の善ではないのです。

Spu. そうは思えません。

Hed. もし本当の善であれば、善人以外にそれが与えられることはありませんし、それに出会った人が祝福を受けるのです。ところで、快樂とは何なのでしょう。正しい善からではなく、誤った善の影から生じたものが正しいものだと思えるのでしょうか。

Spu. 決してそうは思えません。

Hed. 快樂とは、私達が楽しく生きるためにもたらされるのです。

Spu. 勿論です。

Hed. 敬虔に生きているもの以外に、本当に楽しく生きている人はいません。本当の善を享受しているのはそういう人です。ところで、ただ信仰だけが人間に祝福をもたらしてくれるものですし、信仰とは人間にとって最高善の源である神と結合することなのです。

Spu. ほぼ賛成です。

Hed. 快樂以外の何も求めようとしない人が、何と多くの快樂から離れているか見てみましょう。まず、彼等の汚れた心は煮え立つ欲望で害されており、たとえ甘いと思いついでいるにしても、あたかも汚れた泉からはまづい水しか得られないように、いつも苦い水を得ているのです。さらに健全な心で捉えられたものでなければ本当の快樂ではないのですから、怒りによって喜びは護られず、その快樂は苦痛に変わってしまい、あたかも心に病を残すようなものです。

Spu. あえて反対は致しません。

Hed. 要するに、その快樂は誤った善から取られたものであり、その故に妄想が生じたに過ぎないのです。更に、もしあなたが、食べたり、飲んだり、踊ったり、笑ったり、拍手をしたりすることを何か魔術で騙してそうしているのを見たならば、見ていると信じていたものは、本当にはなかったということになりませんか。

Spu. それは狂気であり、全く哀れなことだと言わなければなりません。

Hed. 同様な光景がしばしばあったのです。手品師の技術に熟達した司祭が居りました。

Spu. まさか、聖書から学んだのではないでしょうね。

Hed. 決して聖なるものから学んだのではなく、最も呪われたものからです。ある宮廷の婦人達が、彼のけちや節約を非難しようと宴会に招いてくれるように、しばしば彼に頼んだのです。彼は承諾し、接待しました。彼女達は好きなものを食べるためにお腹を空かしてやって来たのです。食卓につくと、不足しているものは何もありませんし、贅沢な食事のように見えたのです。そして十分に満足しました。宴会が終わって、主人に感謝し、それぞれの家に帰っていったのです。ところが、しばらくしてお腹が鳴り始めます。彼女達はその胃が素晴らしい食べ物に飢えて、空腹のままであることに驚きを感じました。とうとう事実が明らかになり、そのことは笑いのうちに終わってしまったのです。

Spu. 当然の報いです。偽りの見せかけに誘惑されるよりも家でレンズ豆を食べ、胃を満たすべきだということが明らかになったのです。

Hed. しかし、多くの人々が健全な本当の善の代わりに善の影に捕らえられ、その幻影に心を引かれていることの方が私には滑稽に見えるのです。でも、それは決して笑って済まされるものではなく、永遠の悲しみなのです。

Spu. 特に、それが余り不条理だと言われていないように思えるのです。

Hed. では、次に本当はそうでないものに快樂という名称が生じてきたのだということを確認しましょう。あなたは蜂蜜よりはるかに多くのアロエを混ぜ合わせたものが甘いものなどとおっしゃらないでしょうね。

Spu. ほんの少しのアロエが混ぜられたただけだとしても、そうは言わないでしょう。

Hed. また、あなたは他の欲望によってなくなってしまうような悪い欲望を望むでしょうか。

Spu. もし私が自分の心を支配しているとすれば、そんなことはありません。

エラスムスの*Epicurevs* (1533) について

Hed. では、あなたの理性を取り去ってごらんなさい。どんなに大きな苦痛が快楽という誤った名前で混ぜられてしまっていることでしょうか。淫らな愛、認められない情欲、酒盛り、酩酊がそのようなことを生み出しているのです。今、私は全ての頭である良心の呵責を捨ててみましょう。神を憎悪し、永遠の罰を期待することになるのです。お伺いしますが、そのような種類の快楽の中に何かあるのでしょうか、また、外的な悪の大きな働きが何をもたらすというのでしょうか。

Spu. 一体、なんでしょう。

Hed. これに反して、貪欲、野望、怒り、傲慢、嫉妬等、それ自体が悲惨な悪であるものを放棄し、特に喜びの名で奨められていることに私達は集中しましょう。飲酒による熱発、頭痛、腹痛、本性の麻痺、汚名、記憶喪失、嘔吐、胃を壊すようなことが許された場合に、エピクロスはそれでも、そのようなものを望ましい快楽と見なすでしょうか。

Spu. むしろ、避けるべきものというのでしょうかね。

Hed. 青年達が、今の*ἰποκρίζοντες* つまりナポリ瘡⁽⁸⁾と呼んでいる新しい皮膚病を、めったなことではなりません、放蕩によって自分に引き寄せた場合、それによって彼はしばしば生きながら死すべきものとなり、常に生ける屍を持ち回ることになるでしょう。彼は見事にエピクロスになったと見られないでしょうか。

Spu. そうではありません、むしろ、治療を探し求めるように思えます。⁽⁹⁾

Hed. ところで、快楽と苦痛の釣り合いを想像してごらんなさい。あなたは、飲酒と放蕩の快楽を長く続けるのと歯痛の苦痛に苦しむのと、どちらを選びますか。

Spu. 勿論、私は両方ともないように望みます。なぜなら、苦痛で快楽を買い取るというのは利益になるのではなく、保証というべきでしょう。それについてはキケロが「苦痛のないこと」と呼ぶことを好んだ*ἀναλγησία*⁽¹⁰⁾こそ本当に勝っているのです。

Hed. ところで、不法な快楽の刺激、加えられた苦痛はいかに小さなものであ

エラスムスの*Epicureus* (1533) について

っても、時と共に終わってしまいます。ところが、ごく限られた瘡は全生涯を通じて激しく責め苛み、しばしば死ぬ前に死を強要してくるので

- Spu.** エピクロスはそのようなものを弟子と認めたりは致しません。
- Hed.** 大概、放蕩の仲間が欠乏、苦勞、不幸、重荷といったようなものです。つまり、過度な情欲による麻痺、筋肉の震え、眼炎、盲目になること、皮膚病、しかもこれですべてというわけではありません。異常な取り引きというのは正しいものでもなく純粹でもありませんね。この短い喜びに対してあまりにも重く長続きのする悪が取って代わるわけですから。
- Spu.** 責め苦が加えられないとしても、宝石をガラス玉と取りかえるような人は、私に言わせれば最も馬鹿げた取引をする人だと思います。
- Hed.** 虚飾された身体の快樂のために本当の心の善を失ってしまう人のことをおっしゃっているのですね。
- Spu.** そのとおりです。
- Hed.** ではもっと精密な計算に戻ってみましょう。熱や欠乏は常に光を伴うことはありませんし、新しい皮膚病や麻痺がいつもヴィーナスとの過度な交際に伴うわけではありません。しかし、私達の間でそれによってどんな同情もなされることのない良心の呵責は、常に不法な快樂の仲間なのです。
- Spu.** それは、しばしば先行して快樂自身の中で心を苦しめるのです。ところが、あなたのおっしゃるようにこの感覚を失っている人達がいるのです。
- Hed.** そのこと自体大変に不幸なことですよ。ですから、身体が無感覚になったり、感覚を失ってしまうより苦痛を感じることを選ばない人が誰かいるのでしょうか。ところが、いわば酩酊のような快樂による不節制、同様な習慣、あるいは青年時代に悪いという感覚を取り去る鈍感さ、そして老年に達した時にそれまでの生活で犯した多くの過ちの報いとしての無数の災い、誰も避けることの出来ない死の接近を恐れ、ついには全生涯を通じてどんなに無感覚であったかということが良心を非常に苦しめる

エラスムスの*Epicureus* (1533) について

のです。ですから、今、心は望もうと望むまいとにかかわらず目覚めるのです。ところで、老年というのは自ずと苦しいものではありませんし、それは自然の成り行きであるのですが、もし心が悪を自覚するように駆り立てられるとすれば、何と哀れで恥ずべきことではありませんか。青年達にとっては快く思われるような宴会、酒盛り、恋愛、舞踊、音楽等は老人にとっては不快なものなのです。自分のこれまでの行為の記憶、より良い人生への期待というものが正しくあるということ以外、それまでの自分の人生は他に何もありません。老年を支えてくれる二本の杖があります。もしその杖を取り上げる代わりに、誤った人生の行為についての記憶、未来の幸福への絶望という二種類の重荷を負わされるとすれば、おたずねしますが、それより不幸で哀れに造られた動物があるでしょうか。

Spu. 確かに、そんなものは見たこともありませんね。老いて捨てられた馬でさえそれほど哀れではありません。⁽¹¹⁾

Hed. 一言で言えば「フリジア人達は賢くなるのが遅すぎた」⁽¹²⁾ということなのです。もっと正確に言えば次のようなことです。「喜びの最後は悲しみが支配する」⁽¹³⁾「心の喜びに勝る楽しみはない」⁽¹⁴⁾「喜ばしい心は花咲く歳月を生み出し、悲しむ魂は骨を干乾びさせる」⁽¹⁵⁾同様に、「苦しめる全ての日々は災厄である」そして「快活な心は婚宴のようである」⁽¹⁶⁾

Spu. だから事柄を速やかにし、将来の老年に備えをなした人は賢明というわけですね。

Hed. 人間の幸福を幸福な善で計ろうと、神秘的な書物が地上に下ってくるなどということはありません。あらゆる徳に欠け、身体と同様魂も黄泉の神⁽¹⁷⁾に負っているような人は実に哀れなものです。

Spu. なだめることの出来ない集金人のようなものですね。

Hed. ところで、慈悲深い神を持っている者こそ本当に富める者といえるのです。このような保護者を持っている人は一体何を恐れるのでしょうか。人間でしょうか。神に対する人間全体の力等はインド象に対して蚊がなし

エラスムスの*Epicureus* (1533) について

得るよりも小さな事しか出来ません。では、死でしょうか。敬虔な人にとって、それは永遠の祝福への通路でしかありません。黄泉でしょうか。敬虔な人は神を信頼して次のように言うでしょう。「たとえ死の影の谷を歩もうとも、私は災いを恐れませんが、なぜなら、あなたが私と共に居られるからです」悪魔が恐れている方を心の中に持ちながら、なぜ悪魔を恐れるでしょうか。というのは、敬虔な人の心は神の宮であると聖書の多くの箇所が示しており、それは確かなことなのです。

Spu. 常識から全く外れているとしても、私は理性によってそれに反論できるなどとは思いません。

Hed. どうしてでしょうか。

Spu. なぜなら、あなたの三段論法によれば、どんなフランシスコ会士も人生の快楽を得ていることになるからです。それは他の人の富や名誉にも勝るものであり、短く言えば、あらゆる種類の快楽をあふれるほどに持っていることになるのです。

Hed. もしよろしければ君主の笏杖も加えて下さい。教皇の冠もお忘れにならないように。しかもその冠は三重冠ではなく百重冠にして下さい。ところで、あなたは自分の心を良識から引き離しています。私は大胆に言いますが、かのフランシスコ会士は裸足で、結び目の多い綱で帯をし、貧弱でつまらない外衣を纏い、飢え、不眠、労働で弱っており、地上ではわずかな物も持たず、あるいは常識から離れていますが、一人の人間の中に無数のサルダナパロス⁽¹⁸⁾が集められた以上に楽しく生きているのです。

Spu. では、私達が一般に貧しい人は富んでいる人より哀れだと感じるのはどうしてなのでしょう。

Hed. それは、ほとんどの人達が二重に貧しいからなのです。要するに、病気、断食、徹夜、労働、裸足のようなものはただ身体の状態を弱めるだけなのです。ところが、心の楽しさというのはそのようなものにおいてだけでなく、死そのものにおいても台無しにされるのです。なぜなら、心は

エラスムスの*Epicureus* (1533) について

身体の死とつながれておりますが、本来的な強さを持っていますから、身体それ自体はある程度自分の中で変化します。特に、もし霊的なエネルギーが加えられるとすればそうなのです。そこで、真に敬虔に人が何か他の宴会において喜ぶよりももっと大きな快樂の中で死んでいくことを見るのです。

Spu. 確かに、よくあることです。

Hed. 全ての喜びの源に神がいる所には、限りない喜びがあるのは当然です。本当に敬虔な人の心は、死んだ肉体においてさえも喜び続けているものだということが知られなければなりません。同じ人が最も深い黄泉に沈められてしまうとしても、その幸せはどんな害をも被ることはないでしょう。心の清い人がいる所にはどこであろうとも、そこに神がいるのですし、神がいる所はどこであれ、そこがパラダイスであり、天国であり、幸福があるのです。幸福のある所には、本当の喜びと純粋な陽気さがあるのです。

Spu. それでもなお、ある種の災いを離れ、あるいは彼等が見逃していたり、得ることのなかった快樂に達するならば、彼等はずっと愉快に生きることになるでしょうに。

Hed. あなたのおっしゃる災いとは何でしょうか。人間の状態が何か共通の法によって生ずるとでもいうのでしょうか。それは飢えですか、渇きですか、病気ですか、疲労ですか、老いですか、死ですか、雷ですか、地震ですか、洪水ですか、戦争ですか。

Spu. そういうものもあります。

Hed. 私達は人間的なことについて議論しているのであって、人間を超えたものについて議論をしているわけではありません。ですが、そのような災いの中でも敬虔な人々の状態というのは聖俗にかかわらず、求められた身体的快樂よりもはるかに忍び易いものなのです。

Spu. それはどうでしょうか。

Hed. 第一に、彼等は自制とか忍耐に対しよく鍛えられた心を持っていますか

エラスムスの*Epicureus* (1533) について

ら、逃れられることの出来ないことに対して他の人達よりも慎重に事を運ぶのです。次に、彼等は罪を潔めることであれ、徳を試すことであれ、すべては神によって企てられていることを知っておりますから、慈悲深い父の手からその子の服従を忍耐してというだけでなく喜びをもって受け取るのです。また、あるいは慈悲深い訓戒の故に、あるいは測りがたい利益の故に感謝もするのです。

Spu. しかし、多くの人達は身体の重荷を自ら呼び寄せているのですよ。

Hed. でも、彼等は身体の健康を、あるいは守り、あるいは回復するため医師の薬を用います。他方、重荷を呼び寄せるということは、健康に反したこと、つまり迫害、悪評のような難儀なのです。そこで、キリスト教的な愛を働かせないとすれば、それは信仰ではなく、ただの愚かしさというべきです。また彼等はキリストの正義のためにしばしば苦しめられるのですが、主御自身が彼等を祝福されたものと呼び、災いを喜ぶように命じているのですから、一体誰が彼等を敢えて不幸なものと呼ぶでしょうか。⁽¹⁹⁾

Spu. しかし、その間彼等は苦しい感覚を持っている筈ですよ。

Hed. そうです。しかし一方では地獄の恐怖が、他方では永遠の祝福への希望がそれを容易に飲み下してしまうのです。ところで、もしあなたがその全生涯を通じて病気や身体の厄介な感覚を納得しようとせず、ピンの先端で皮膚が刺されることをさえ苦しむとしたら、苦しみの少ないほうを喜んで受け入れないでしょうか。

Spu. 勿論です。もし生涯歯痛を決して知ることがないとしたら、同じように針を深く刺し込んだり、両耳に針を貫き通すことでさえ受け入れるでしょう。

Hed. それにもかかわらず、人生において生ずることがなんであれ、軽い苦難でも、重い苦難でも、たとえその人生がどんなに長いものであったとしても、束の間のピンによる小さな傷よりもはるかに永遠の拷問となるのです。というのは、無限に対する有限の類比はどこにもありません。

エラスムスの*Epicureus* (1533) について

Spu. まったくそのとうりです。

Hed. では、ピタゴラスはそうすることを拒んだのですが⁽²⁰⁾、誰かがあなたに、もし手で焔を分けるなら全生涯を通じてあらゆる重荷から遠ざかっていることが出来るようにしようと約束したら、あなたはそれを喜んでしますか。

Spu. 勿論、いくらでもしますよ。ただ約束した人が騙さなければですが。

Hed. 神は全く騙すことなど出来ません。しかし、人間の全生涯が永遠の祝福に関して続く以上に焔の感覚はネストル⁽²¹⁾の三倍もの長い生涯にわたって続くのです。焔の中に手を置くことがどんなに短い時間であるとしても、それは人生の一部であるように、人間の全生涯は決して永遠性の一部になることはないのです。

Spu. それに対しては何も言うことがありません。

Hed. これに対して、心を込めて確かな希望を持って歩んでいる人々が、速く過ぎ去ってしまう人生を重荷で苦しめられるということがあなたに信じられますか。

Spu. いいえ、信じたくありません。でも、確かな信念と堅い希望が目的に達するということはあるでしょう。

Hed. では、次にあなたが提示された楽しみということについて言及してみましよう。彼等はダンスや酒盛り、観劇のようなものから離れています。勿論、このようなものを軽視し、もっと喜ばしいものを享受して多いに楽しんでいます。しかし、それは全く別のものです。「目が見もせず、耳が聞きもせず、人の心に思い浮かばなかったこと」⁽²²⁾に彼等は到達するのです。そのように慰めになることを神は彼等のために入念に用意して下さったのです。聖パウロは歌うこと、踊ること、酒盛りがこの人生において敬虔な心の人々に何であるかということを知っていたのです。

Spu. しかし、彼等が自分自身に禁じているけれども合法的な快樂というものもありますよ。

Hed. 合法的な快樂を過度に用いることは許されておられません。そのことを別

エラスムスの*Epicureus* (1533) について

にすれば、苦しい人生を運んでいるように見える人達も他の全てのことに
 においては優れているのです。この世についての観想よりもっと立派な
 観劇が何かあり得るでしょうか。他の何よりも愛すべき神によって人間
 は遙かに大きな喜びを得るのです。注意深い目でその驚くべき業のこ
 とを冥想してみるなら、多くの事柄の原因を理解しないことに心は苦しめ
 られるでしょう。あることに関して、モーモス⁽²³⁾のように自然の製作者
 を母と呼ぶかわりに継母と呼ぶこともまれではありません。中傷する者
 達は名目的には自然を造ったかもしれませんが、本当は自然をお造りに
 なった方によって全自然が存在するとすれば、彼はその中に漲っている
 のです。そして、敬虔な人は心からの喜びをもって信仰深く単純な大き
 な目で主なる父なる神の業を眺めて、その一つ一つに驚き、決して非難
 などせず、全てのことの故に感謝をするのです。それはそのすべてが人
 間のために造られたものだと判断するからなのです。そして、特に一つ
 一つのことに創造者の全能と智恵と善とを称えるのです。創られたもの
 の中にその足跡を見出すからなのです。アプレイウスがプシュケーを想
 ったように何か本当に宮殿があると想像してごらんください。もし出来る
 ならば、もっと豪華なもの、華美なものを想像してごらんください。そこ
 に二人の観察者を当てはめてみるのです。一人は、ただそれを見るため
 にやって来た異国人、もう一人はその建物を築いた人の召し使いあるい
 は子供です。どちらが熱烈に喜ぶでしょうか。自分の家とは関係のない
 その異国人でしょうか、それとも喜びを持って大きな建物に示された最
 愛の父の才能、業、優秀さを見ている子供でしょうか。特に、この仕事
 全体が自分自身のためになされたのだと考える時はどうでしょうか。

Spu. 質問の答えには窮しますが、多くの敬虔でない人々でも天と天によって
 隠されているものが人間のために造られたのであることは知っています
 よ。

Hed. ほとんどすべての人が知っているとは言っても、すべてのことを理解し
 ているわけではありません。もし理解しているなら、もっと大きな喜び

エラスムスの*Epicureus* (1533) について

を得て偉大な創造者を愛する筈です。天の生活を得ようと努める人であれば、もっと熱心に天を眺めるでしょう。

Spu. 多分、おっしゃるとおりでしょう。

Hed. ところで、宴会の魅力は贅沢な味覚とか良く調理された食べ物ではなくて、快適な身体や健康や食欲ある胃にこそ依存しているのです。ですから、あるルクルス⁽²⁴⁾がもっと気持ち良く食事をするということについて注意してごらんください。敬虔な人は普通のパン、野菜、豆、飲み物、あるいは水または薄いビール、適度に調合されたワインを供するのに比べて、ルクルスは蝦蛄、雉、雉鳩、兎、ベラ、鯰あるいはウツボを食卓に備えるのです。敬虔な者は、これらを恵深い父から与えられた賜物のように受け取っているのですから、すべてを祈りで味付けし、何よりも先に祈願を奉獻し、聖書を読むことが伴侶となり、食べ物は身体よりもその精神を生き生きさせ、恩寵が続いて働き、最後に食卓からはどんな多くの素晴らしい食べ物よりも心と身体を回復させてくれるようなものを取り上げることになるのです。そのような普通の快樂の創始者と共に食事をするここそ喜ばしいことだとは思いませんか。

Spu. しかし、もし私達がアリストテレスを信じるとすれば、愛欲の中にこそ最高の快樂があることになりましたが。⁽²⁵⁾

Hed. 敬虔な人はそのことでも宴会におけるより少なくないものを得るのです。次のように理解してみてください。妻への愛情がより強いものであれば、それだけその結婚は喜ばしいものなのです。更に、キリストがその教会を愛されたほど強くその妻を愛するものなどどこにもありません。妻との交わりが希であれば、それだけより快いものになるのです。そのことは世俗的な詩にも次のように書かれているのです。「希なる使用は快樂を価値あらしむ」と。しかし、交合の中にあるのは快樂の最も小さな部分です。はるかに大きいのは永遠に続く交友であり、それはキリスト教的な愛で、真実に愛し、かつ互いに愛し合う人々の中におけるよりもほかのどんな人々の中でもそれほど喜ばしいものではあり得ないのです。

エラスムスの*Epicureus* (1533) について

他の人々においては、快樂が少なくなっていくにつれて愛も無力になっていきます。キリスト教的な愛は大きな身体的快樂がなくなっても、もっと強くなるのです。信仰をもって生活している人よりも喜んで生きている者はいないと言う気になりませんか。

Spu. 願わくば、すべての人が同じような気持ちになるように願いたいものです。

Hed. もし楽しく生きている人達がエピキュリアンであるとしみますと、神聖に敬虔に生きている人達以上のエピキュリアンはいないということになります。それに、もしその名が私達を悩ませるようなものであるとすれば、それはキリスト教哲学の祖とあがめられるエピクロスの名に値しないものとなってしまいます。なぜなら、ギリシャ語で *ἐπίκουρος* は援助者を意味しているのですから。自然法は罪過によっても駄目にされることはありませんし、モーセの律法は快樂を回復するというよりも無効にし、独裁者たるサタンはこの世を邪魔されることもなく支配しているのですから。その援助者だけが人類に速効の助力を与えてくれるのです。ですから、キリストが本来的に悲惨で憂鬱であるとか、私達が不快な人生に招かれているというようなたわ言を言うような人達こそ非常に騙されているのです。反対に、彼だけがすべての中で最も喜ばしい人生、最も完全な真の快樂を示されたのであり、タンタロスの岩からはるかに離れているのです。

Spu. それはどういう謎でしょうか。

Hed. あなたは、その物語をお笑いになるでしょうが、それは深刻な冗談でもあるのです。

Spu. では、その深刻な冗談に期待しましょう。

Hed. 昔、哲学的な教えを物語りに包んで隠そうと熱心になった人々が語ったのです。最も優雅なものであることを意図していた神々の食卓にタンタロスが招かれたというのです。客が帰る時間になった時、ジュピターは贈り物もなしに客を帰らせてはならないという贅沢なことを考えて、欲

エラスムスの*Epicureus* (1533) について

しいものがなんであれ、その要求を受け入れると、客に欲しいものを求めることを許したのです。ところが愚かなタンタロスは、人間の胃と食道の快樂のみで祝福を量ったので、その生涯の間このような素晴らしい食卓につくことが出来るように求めたのです。ジュピターはそれを承認し、彼の願いは許されました。タンタロスは用意されたあらゆる種類の食卓の側に坐していました。甘美な香料がありましたし、神々の鼻を楽しませるバラの香りや乳香も不足してはおりません。盃の奉持者であるガニューメデースやガニューメーディも同様に側にいます。楽しく歌うムーサもその周りに立っています。滑稽なシレヌスは踊っていますし、どんな人間の感覚でも容易に楽ませることの出来る道化も欠けてはおりません。ところが、そのようなすべての中で、タンタロスは憂鬱そうに嘆息し、不安げに座っており、快活な笑いもなければ、近くにある食べ物に触れることさえしません。

Spu. いったい、どういう理由によるのでしょうか。

Hed. 横になっているその頭の上には大きな岩が今にも落ちるかのように細かい髪の毛でぶらさがっているのです。

Spu. 私ならそんな食卓からすぐ離れたでしょうに。

Hed. ところが、彼の願いは強制に変わってしまったのです。何故かと言えば、ジュピターは、人間が悔い改めればその有害な願いを無効にして下さるような私達の神ほど穏和な方ではありませんから。その上、タンタロスは逃げることもならず、岩によって食べることもままならないのです。だから、彼は少しでも動けば直ちにその岩が崩れ落ちて押し潰されるのではないかと恐れていたのです。

Spu. 馬鹿馬鹿しい話しですね。

Hed. 私が聞いた次のことなら馬鹿馬鹿しいと思われたいでしょう。確かなことによるのでなければ喜ばしい人生を得ることなどできはしないのに、一般の人達は外的なことからそれを得ようとしています。だから、悪い考えのゆえに、タンタロスの頭の上にもぶら下がっているよりはるかに重

エラスムスの*Epicureus* (1533) について

い石が彼等の頭上にあることになるのです。実際に頭上にあるのではなくとも、心を駆り立て、圧迫しているわけです。心が無用な恐怖によって責め苛まれているのではなく、いつでも不安にされているのですから、地獄に投げ入れられているのと同じなのです。お尋ねしますが、このような石によって圧迫されている心を本当に解き放つことの出来る人間的な何かがあるのでしょうか。

Spu. 狂気や不信以外には、確かなことは何もないと思います⁽²⁶⁾。

Hed. 快楽や毒の盃のために正気を失って、本当の喜びのかわりに香しい毒に取り付かれた青年達が無思慮によって過ちを犯さないように、また生涯に亘って心を悩ませることがないように熱心に警戒するように良く考えて欲しいものです。また、来るべき老年のために用意するために、良心や名声をどんな汚れによっても汚すことのないように何かしないでしょうか。背後を振り返った時に、蔑ろにしていたものが実は大切なものであり、大切にしていたものがつまらないものであったのを見て戦慄するというのは何と哀れな老年ではありませんか。逆に、前を見る時には、最後の日が接近し、そこからすぐに黄泉の永遠の罰が迫っているのを見ることになるでしょう。

Spu. 青年時代を汚れないように保ち、常に敬虔な努力を続け、そして老年の終局に至る者こそもっとも幸いな者と言うべきです。

Hed. 青春の醜態から早くさめて改心する者にその次の場所が備えられています。

Spu. でも、哀れな老人にはどんな助言を与えれば良いのでしょうか。

Hed. 「何人にせよ呼吸する限りは絶望すべきでない」⁽²⁷⁾と。私は主の憐れみの中に避難するように奨めるでしょう。

Spu. しかし、長く生きれば生きるほどに、罪悪の量はそれだけ増えますし、それこそ海岸の砂ほどにもなっているのです。

Hed. それでも、神の憐れみはその砂をはるかに超えたものなのです。たとえ砂は人間に数えることが出来ないとしても、それでも砂には限りがあり

エラスムスの*Epicureus* (1533) について

ますが、主の憐れみは限度も境界も知りはしないのです。

Spu. まもなく死ぬであろう人には時間がありません。

Hed. 時間が少なければ少ないほど、熱心に神に叫ぶものです。神の側ではこの世から天に達することの出来る時間は十分に長いのです。というのは、短い祈りで天国に入るのですし、霊の激しい熱意の故に天国に投げ入れられるのです。福音書では、生涯悔い改めを求めていた女性の罪人のことが述べられています。また、死に臨んだ強盗でも短い言葉でキリストによって天国に達したのです。もし心から、「神よ、あなたの大いなる憐れみによって私を憐れんで下さい」と叫ぶならば、主はタンタロスの岩を取り除けて下さいます。「喜び祝う声」を与えて下さるでしょうし、悔悛による罪の赦しの故に「砕かれた骨が喜び踊るでしょう」⁽²⁸⁾

【注】

- (1) *Convivium Religiosum* (1522) についてはその抄訳である次の拙論参照の事。「エラスムスの *Convivium Religiosum* (1522) について」『福岡女学院短期大学紀要』第20号、1984、p.1-29
- (2) 対話中の登場人物の名前について、エラスムスはその都度様々な工夫を凝らしているが、この場合の *Hedonius* は「喜びを求めるもの」、*Spudaeus* は「厳格な人、真面目な人」という意味。
- (3) キケロの倫理的作品中 *De finibus* (『目的論』) に収められた *finem boni* (善の目的) を指している。
- (4) *Nihil est miserius, quam animus hominis conscius*. プラウトゥス (B.C. 254-184) の作品『幽霊』*Mostellaria* からの引用。当時の日常語を自由に用いて優れた喜劇を作っている。
- (5) マタイによる福音書5章の「山上の説教」のうち、「幸いである」といわれている場所についての言及。
- (6) *Umbra pro corpore* という格言、すなわち「体のかわりに影」の意味であり、実体のない偽りの状態を指す。
- (7) *Κίχλωψ*、ホメロスにおいては一つ目の巨人族で、野蛮、乱暴で人食いの民族とされる。
- (8) ナポリ瘡については同じ『対話集』のうち、*Militis et Cartusiani* に詳しい紹介が載せられている。イタリア瘡、フランス瘡、スペイン瘡の名によっても知られている。拙論「エラスムスの *Militis et Cartusiani* (1523) について」『福岡女学院短期大学紀要』第22号 (人文科学) 1986、p.11及び注(24) 参照
- (9) ここは、すぐ前の *Hed*、の台詞「エピクロスになった」*ἐπικουρίζειν* 受けて *ἐπι κουρέια θέιν* とするギリシャ語の語呂合わせをしているところであり、その部分を本文のように訳出した。
- (10) 本来的には「感覚の欠如」「無感覚」を意味しているが、ここでは苦痛に対しても平静であることへと意味が展開していく。

エラスムスの*Epicureus* (1533) について

- (11) 本文中ではギリシャ語を用いている。Τὸ Ἴππου γῆρας「老いた馬」の意味であり、エラスムスはその『格言集』にこの言葉を取り上げている。そこには第一線を退いた立派な人々でも、その出自がいかに立派であれ、年老いてくれば水車引きか荷車引きに転落する運命を担う血統の良い馬と同じという意味が込められている。
- (12) 意図しているところは文字通りの意味を伝える事であるが、事柄としてはトロイア戦争の時に、トロイアの馬に最後まで気がつかなかったフリジア人達のうかつさを評したものである。『格言集』にも取り上げているが、ここでは今日のキリスト教が戦争の悲惨に気が付かなければ、これと同じ結果になると警告する事も忘れていない。
- (13) 箴言14：13
- (14) シラ書（集会の書）30：16
- (15) 箴言17：22
- (16) 箴言15：13及び15：15
- (17) Orcus ローマ神話の死、黄泉の神でギリシャ神話ではプルート、ハーデスにあたる。
- (18) アッシリア最後の王、豪華な生活で知られている。
- (19) マタイ福音書5：10-12、注(5)とも関連。
- (20) ピタゴラスにとって火は、神聖なものであり宇宙の中心にあるものであったから、それに触れる事を拒んだのである。アリストテレス『天体論』2.13.293以下の論述による。
- (21) 「イーリアス」によれば、人間の三代目まで生きる長寿の老人として描かれている。その長寿の原因は母スローリアスの兄弟姉妹の子供達を殺戮したアポローンがその命を彼に与えたからだということになっている。
- (22) コリントの信徒への手紙, 1, 2：9（イザヤ書からのパウロの引用）
- (23) Μῶμος は皮肉や他人への非難の擬人化されたもので、ルキアノスによって神々への皮肉の代弁者とされている。この台詞にそのことが反映されているとみることが出来る。

- (24) Lucullus (B.C 110-57) ローマの将軍で余生を贅沢に過ごしたことで有名である。
- (25) アリストテレス『動物発生論』第1巻第18章参照、『アリストテレス全集』9 (島崎三郎訳) 岩波書店1969 p.118-120
- (26) ルターは、1534-35年に為した詩篇講解においてこの言葉を取り上げてエラスムス批判をしている。つまり、その不信仰、快樂主義等々に対する批判である。しかし、この言葉をコンテキストの中において読んでみる時、いかように理解するのがエラスムスの真意に適うかが明らかになるであろう。
- (27) キケロの「Atticus への書簡」にある格言。Aegroto dum anima est, spes esse dicitur.をエラスムス自身の表現に直したもの。Nulli desperandum, quam diu spirat と。
- (28) 詩篇51編 3 と10節の引用。